中高生とともに差別と闘う

「選んでくれてありがとう」

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

「ハッピーエンド」

授業の最後にした父の死についての話。

ちょうど一週間前の昼前、突然病院から、「すぐに来てください」と電話がかかってきたこと。駆けつけたときにはすでに息絶えていたこと。翌日の卒業式には参加したものの、式後すぐに退勤したこと。その翌日にはお葬式を執り行ったこと。そんななか、父との思い出を探しては浮かび、やっぱり大好きな人だったんだなと思わせられたこと。皮肉にも、ばらばらになった家族が、お葬式で再会したこと。部落差別について怒鳴り合い、激しい言い争いになることはあったものの、人はそんなに簡単に割り切れない複雑な思いのなかで生きているのではないだろうか、と話させてもらいました。そんな話をしている間中も、前号冒頭の曲「ハッピーエンド」が、ずっと頭のなかで流れていました。

親への思い

授業でグループ討議をしている最中、嗚咽しながらも、懸命に班の仲間に語りかける中学生を見かけました。隣に座る友人が、ずっとその背中をさすり続けていました。それでも自分語りを止めることなく、班の仲間に語り続けていました。彼女は母子家庭のなかで生活をしている子でした。私の、「自分の家族について語り合おう」に応えて、日ごろの思いを伝えていたのだと思います。

その彼女が授業後につづった授業感想です。

「私は二年生最後の全体学習で、『他人事として考えない』ことの重要性をあらためて知り、実感しました。『父が隠した〝家族〟を観て、私は『親は背中だけを見せればいい』という言葉がとても心に残りました。自分の子どもと離れて暮らす木村さんや、全体学習で話してくださった吉成先生が、『親失格』と言っていましたが、私はそうは思いません。離れていてもちゃんと愛してくれているのなら、私的にはそれで十分だと思います。人それぞれ感情は違いますが、親への気持ちを一つに絞るなら、ほとんどの人が感謝だと思います。私もこの動画を観て、親への感謝の気持ちが深まりました。私はこの全体学習で、命の大切さや差別で苦しむ人の気持ちを考えることができました。この経験をこれからに生かしていきたいと思います。」

こんな純粋な懸命さに、心癒され励まされます。そして、救われます。

大切な人を失うことは、その人から贈られる、「最後のプレゼント」でないかと、今は思います。それまでにあった出来事のすべては、私が自由に羽ばたくための力をつけてくれていたのではないかと。失うことは喪失ではなく、羽ばたくために必要な、得難く必要な経験ではないかと。

「もう大丈夫か、あとは頑張れよ」

父の声が聞こえる気がします。

そしてこの一週間後、さらなる衝撃の場面に出くわします。

選んでくれてありがとう

一週間後は人権こども塾の閉講式でした。そこで、日ごろから積極的にマイクを持つことのなかったココネが、自ら手を差し出します。

＊

「私は最近あった学校の人権学習で、家族についての語り合いで、本当は語りたかったんですけど、他の人の目が怖くて発表ができなくて。その時からずっとモヤモヤしてたので、今日はちょっと語ろうかなって思います。

私の家族で、母が部落出身なんです。それを聞いたのが中学生になった初めくらいの時で。人権学習を始めて、それを家族に話した時にその話をしてくれたんですけど。

母は父に出会ってつき合って結婚する時に、父方の親御さんに母が部落であることを伝えた時、部落出身ということで結婚することに反対するって言われたらしいんです。

私のお父さんは母と結婚したいって話し合ったら、おじいさんから、『親子の縁を切るか、母と結婚するか』という、究極の二択を与えられたんです。その時、父はすっごい考えて、倒れるほど考えて。結果は、親子の縁を切ってでも母との結婚をする方を選んでくれたんです。

もし父が母と結婚せずに親子の縁を切らずにいたら、私は存在しなかったから、父が親子の縁を切ってでも母との結婚を選んでくれたので、すごい私は良かったな、格好いいなって。親の言う方でなく、結婚の方を選んでくれたのがすごい嬉しくて。感謝をすごいしています。自分の意見にまっすぐなのがいいなって思いました。」

＊

こども塾に参加している中学生が通っている校区に被差別部落はありません。ですから、身近に当事者がいるとは思っていなかったと思います。その場にいたみんなが自分事になった瞬間だったと思います。

お母さんはかつての教え子でした。中学時代は学習会に通い、共に部落差別解消に向けて取り組む「仲間」でした。その思いに誇りを持っていたため、我が子にも自分のルーツを伝えたい思いが強くありました。しかし故郷を離れ、いつ、どうやって伝えればいいのか、悩んでいたのです。それが、たまたま私と再会し、たまたま娘の親友が先んじて人権こども塾に入っていたことで、途切れていたように見えていた細い細い透明な糸が、三〇年の歳月を経て急に浮かびあがり、紡がれていったのです。とはいえ、よもやこのタイミングで娘の本心を知ることになるとは、思いもよりませんでした。

「娘に思いは伝えた。でも、それをどう受け止めたのか…」そんな母の不安をよそに、娘はちゃんと受けとめ、仲間に伝えるまでに成長していたのです。

子どもたちは、私たちが思うよりずっと、たくましく成長できるものだと、あらためて思い知らされました。やはり、信じることです。すべてはそこからです。

イラスト　中島　亜唯